

アジアの繁栄と日本の将来

千野 忠男 (25回)



藤枝東高校創立八十周年おめでとう。正史の寄稿。大正十一年の開校以来、二十世紀に果たした地元の志士が、この地に果たした役割。地元の志士が、この地に果たした役割。地元の志士が、この地に果たした役割。

このように二十世紀初めには、アジアの台頭が目まぐるしくあり、日本はアジア以前は停滞的な地域だったのかというところ、決してそうではない。アジアが目まぐるしくなってきたのは十九世紀以降、欧米が産業革命と工業化による経済的優位を背景としてアジアの大部分の国を植民地、又は半植民地にしてからのことである。そして、十七世紀の半ばから十八世紀、特に十六、十七世紀はアジアが世界の中心であった。アジア文明の産物であるシルクロード、磁器、絹、陶器などはヨーロッパ人のあこがれの的であり、それらの輸入なしには暮らしが成り立たなかった。十六世紀から十七世紀初めにかけては日本は室町時代の戦国末期及び安土桃山時代であるが、世界の二、三を争う大銀の生産国であり、世界文化大に発展したアジアが無視されるようになったのは十九世紀以降のことである。それ以前はアジアが世界経済の中心であった。世界経済の中心がアジアから十九世紀にヨーロッパと英国から大西洋をわたって米国へ、そして二十世紀後半に日本へ移る動きは、太平洋を渡って再びアジアに戻る動きは、目下進行中である。

追憶

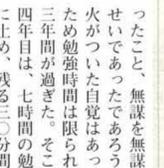


私に藤枝東高校に入学した昭和十一年は、一月にサッカー部が第四回全国高校サッカー選手権大会に出場した。私に藤枝東高校に入学した昭和十一年は、一月にサッカー部が第四回全国高校サッカー選手権大会に出場した。

私が藤枝東高校に入学した昭和十一年は、一月にサッカー部が第四回全国高校サッカー選手権大会に出場した。私に藤枝東高校に入学した昭和十一年は、一月にサッカー部が第四回全国高校サッカー選手権大会に出場した。私に藤枝東高校に入学した昭和十一年は、一月にサッカー部が第四回全国高校サッカー選手権大会に出場した。

里山の変貌・竹林拡大を考える

山田辰美 (44回)



安藤広重による東海道五十三次(保元堂)の浮世絵は日本の原風景を描いている。伊勢の景を描いている。伊勢の景を描いている。伊勢の景を描いている。

安藤広重による東海道五十三次(保元堂)の浮世絵は日本の原風景を描いている。伊勢の景を描いている。伊勢の景を描いている。伊勢の景を描いている。伊勢の景を描いている。伊勢の景を描いている。伊勢の景を描いている。伊勢の景を描いている。伊勢の景を描いている。伊勢の景を描いている。

好きだから続いている

北村 さゆり (52回)



絵を描いている。これほど楽しくなるとは思いもかけなかった。考えたみれば、高校生活は本当に熱中した事は何一つなかった。考えたみれば、高校生活は本当に熱中した事は何一つなかった。

絵を描いている。これほど楽しくなるとは思いもかけなかった。考えたみれば、高校生活は本当に熱中した事は何一つなかった。考えたみれば、高校生活は本当に熱中した事は何一つなかった。考えたみれば、高校生活は本当に熱中した事は何一つなかった。

時を重ねて80周年そして輝く未来へ

特集 創立八十周年の歴史を辿る

1 旧制志太中の歩み

志太中開校後、千南原の地に本校が建てられ、昭和三年に講堂、武道場、図書館が落成し、校舎建設は一応の完成を見た。第一期生108名は、大正十一年に新校舎に移ったが、校庭はまだ雑草地であった。彼らは毎日放課後に除草作業を行い、校庭を整備した。現在も残る校庭横の松並木は、その際に植えられ、学校とともに歳月を経ているのである。

2 戦前・戦中(志太中後期)

昭和十二年四月七日、私は十四回生に就任した。思い出せば、私は十四回生に就任した。思い出せば、私は十四回生に就任した。思い出せば、私は十四回生に就任した。思い出せば、私は十四回生に就任した。

3 藤枝東高校誕生当時

第二次大戦後の学制改革は、時の世相と同様に、混沌からの出発であった。志太中も、併設中設置(昭22)志太高(昭23)藤枝高(昭24)と目まぐるしい変遷を経て、東高誕生(昭27)に至った。

4 サッカー黄金期

昭和二十九年小学校三年生の頃、藤枝のユニフォームに憧れた。ユニフォームに憧れた。ユニフォームに憧れた。ユニフォームに憧れた。ユニフォームに憧れた。

5 昭和後期

今から四半世紀以上も昔に在職したの記憶は、懐かしいかと思うが、寛容に過ぎない。懐かしいかと思うが、寛容に過ぎない。懐かしいかと思うが、寛容に過ぎない。懐かしいかと思うが、寛容に過ぎない。

昭和十六年太平洋戦争が始まり、戦局が激化すると兵隊志願者が激増し、陸海軍諸学校を志願する生徒が激減し、昭和十九年生徒動員令で、生徒は各地の工場に通年勤動員し、学校で学ぶことができなかった。二十年終戦、幸いにも戦災を免れた学校には、多くの生徒たちが戻ってきた。教科書は薄く、食糧は乏しく、疎開や引揚による転入生が多く教室に机が入りきれない有様であったが、とにかく平和が学校におとどけたのだ。

昭和二十二年、市町村に新制中学ができ、二十三年三月卒業の第二十二回生を以って終わりを告げたのである。(藤枝東高五十年史)より抜粋

昭和二十六年六月、私は藤枝東高校に就任した。昭和二十六年六月、私は藤枝東高校に就任した。昭和二十六年六月、私は藤枝東高校に就任した。昭和二十六年六月、私は藤枝東高校に就任した。

昭和二十九年小学校三年生の頃、藤枝のユニフォームに憧れた。ユニフォームに憧れた。ユニフォームに憧れた。ユニフォームに憧れた。ユニフォームに憧れた。

今から四半世紀以上も昔に在職したの記憶は、懐かしいかと思うが、寛容に過ぎない。懐かしいかと思うが、寛容に過ぎない。懐かしいかと思うが、寛容に過ぎない。懐かしいかと思うが、寛容に過ぎない。

創立八十周年に寄せて

藤枝東高が、創立八十周年を迎える。創立八十周年を迎える。創立八十周年を迎える。創立八十周年を迎える。創立八十周年を迎える。

創立八十周年記念式典のご案内

本校創立八十周年記念式典として、十一月二十六日(金)午後一時より焼津文化センター大ホールに於いて記念式典を行います。校長挨拶、PTA会長挨拶、同窓会長挨拶、そして、生徒会長挨拶の後、講師としてビクター・フランクリン氏をお招きし記念講演を行います。